

大人は自分のやって来たことを振り返って

——子ども達は変わったか？

高原 数則

中学生による重大に事件があいつぎ「普通の子がすぐキレル」などと言われ、小学校でも「学級崩壊」「授業不成立」など子ども達の「新たな荒れ」が深刻な問題とされている。

しかし子ども達はとんでもなく変わり、本当に「荒れ」ているのだろうか。

子ども達に何が起き、子ども達は何を考えているのか。子ども達の声や姿を中心に私たちの課題について考えてみたいと思う。

「人生をぶち壊したくなる」

「私も彼と同じ立場にあります。私も今までずっと一人でした。見かけはみんなの輪の中にいるように見えるかもしれないけど心は一人なんです。みんなそうです。心のどっかで憎しみがある。みんな我慢しているんだ。今は平和かもしれないけど心は悲しくさみしいし、穴がある。何でこんな時代に生きてきたんだろうと時々思うことがある」

「将来のことがプレッシャーとなって降りかかってくる。だからたまに本当に自分の人生をぶち壊したくなることもある。誰でもめちゃくちゃになりたい時は必ずあると思う」

神戸の事件の際の中学3年生の意見である。両方とも普通に学校生活を送っている子どもの声である。

わずか15才の子ども達が寂しさ・孤独や憎しみをかかえ、見通しと自分自身をつかむのではなく「自分の人生をぶち壊したくなる」ような社会。子ども達がこれほどの悩みと葛藤をもって「こんな時代に生きて」いることを普段の私

たちがどれほど気づかっているかが問われる。いわゆる「荒れ」た行動や挫折をつまずきが表面に現れない場面でも、子ども達は孤立し、先の見通しも見えない不安と寂しさの中で健気に生きようとしているのではないだろうか。

そして「こんな時代」を作った責任は子ども達にはなく、彼らには当面それを変える力もない。

にも関わらず、「キレル子ども達」や「荒れ」そのものが問題にされ子ども達自身にその原因があるかのように言われ、「持ち物検査」や挙げ句の果てに「少年法改正」までが持ち出されている。また文部省は「毅然とした指導」や「警察との協力」「校長のリーダーシップ確立」などを強調し、教育行政の責任を子どもと学校の問題にすり替えながら学校の管理体制をさらに強化することを企んでいる。

しかし、今日の事態の原因と責任が教育政策や私たち大人の姿勢も含めて社会にこそあるのはここに挙げたような子ども達の声を見れば明らかではないだろうか。

変わったのは子ども達ではなく教育政策や彼らが生まれ育ってきた社会なのだ。子ども達を豊かな感性を持った人間として育てる働きが機能しない社会そのものが問われるべきなのである。

「こういう社会にしてしまったのも大人達だし少しは自分のやって来たことを振り返って、間違ったことを犯していないかを確認してほしい」

ナイフ事件についての中3の意見である。

息をひそめる「普通の子」

何が子ども達をこれほどの悩みと葛藤に追い込んでいるのか考えてみたいと思う。子どもを取り巻く暴力的・退廃的な文化状況や大人社会のモラルの低下、さらには大企業優先・国民生活犠牲の自民党政治による生活不安、家庭・地域破壊、能力主義・競争原理に貫かれた労務政策など考えるべき課題は多面的だが、ここで教育にしばって考えてみる。

国連の「子どもの権利委員会」は今年6月、日本政府に対して、「極度に競争的な教育制度によるストレスのため、子どもが発達上の障害にさらされていること、及び教育制度が極度に競争的である結果、余暇、スポーツ活動および休息が欠如している」として教育制度の改善を勧告した。

「小学校卒業までに3割の子が分かればいい」とする現行学習指導要領が導入されて8年。

十進法も教わらない小学校1年生に何時何分まで読ませ、デシリットルを使わせたり、かけ算九・九の時間を著しく減らすなど発達段階・理解力を無視して系統性の無い学習内容を押しつける指導要領に対して私たちは「子どもの発達を疎外し、教室と子ども達を深刻な状態に追い込む」ものとして導入当時から強く批判をしてきた。

子ども達はともすれば小学校低学年から日々の授業で「分かる楽しみ」を奪われ挫折し自信と誇りを失わされているのである。さらに文部省は「理解できないのも個性のうち」「分からない子はそれなりに」などと子どもを切り捨てる「指導」を教師に押しつけ、分かろうとする子どもの意欲を奪い、子ども達自身に早い時期から見切りをつけることを強要している。子ども達の発達の土台が崩れているのである。子ども達がゆったりと穏やかに過ごせるわけがないのである。

この8年間、文字通り「3割の子どもが分か

ればいい」という状況が進行し、まさに私たちの批判や国連の指摘通りの深刻な事態が全国で生まれているのである。

そのうえ管理主義的体制・生活指導は服装や髪型から持ち物、果ては下着やあいさつの仕方に至るまで仔細にわたって子ども達を規制し、そこからはみだす事のない様に暴力も含めた「指導」が徹底される。しかもこの管理体制で子どもの声を抑えなければ現行の教育課程は進められない点に事態の深刻さがある。

さらに内申書重視の入試制度は目立たない「普通の子」「良い子」である事を子ども達に強要し「柔順な子」を大量に作り出し、中学1年から「生活態度って内申に響くよね」「ケンカするとダメだね」などと聞く子も決して珍しくない。

このようにして個性を出すことや自己主張を抑えられ、目立たない「普通の子」であることを押しつけられる。個性と人格を削られ、多数の子ども達が息をひそめてジッとしているのである。

このような中で「あるべき姿」や「決まり」・大人の思い入れに従って子どもの姿を考えるならば、子ども達1人1人の悩みや葛藤・発達課題は見失われてしまう。そして「生きる力」や人間らしい感性を育むのではなく、無力感ととらえどころのない不安や寂しさ、ストレスの蓄積した不安定な精神状態に子ども達をさらに追いつめることになる。

そこに何らかのキッカケがあればその精神状態が一気に堰を切って爆発をする。それが「普通の子」が「キレル」時ではないだろうか。

優しさと健全さに気づく優しさとゆとりを

子ども達は「極度に競争的」な「こんな時代」の中で苦悩しつつ、「非力」ながらも必死に自分自身をつかみ、しっかり生きようと、もがいているのである。「否定的な姿」や「荒れ」そのものが「分かりたい」「切り捨てないでしっかり見てほしい」「悩みを聞いてほしい」などの当然で

切実な訴えかけなのである。そう考える時「否定的な姿」や「荒れ」の向こうに困難な時代を健全に生きる「未熟」な愛すべき子ども達が見えてくるのではないだろうか（その意味で本特集の「年少者犯罪」という言葉には疑問がある）。

子ども達は大人に話を聞いてもらいたいし頼りたいのだ。子ども達は本来大人に見守られ保護され、ある時には甘えながらも試行錯誤を繰り返して力と自信をつけ自分を確立していくものである。

いま子ども達にはこの甘えられる保障と、守られ認められている安心感のもと試行錯誤を繰り返す場と時間こそが必要であるとともに、大人にはそれを見守れるゆとりと体制が求められ

ているのである。

「分からない事があれば友達同士で助け合う。成績の悪い人がいれば友達同士で助け合う。これが大切なんじゃないか。困った時だって、つらい時だって友達がいる。今は勉強よりも友達が大切だと思う」「持ち物検査をやってナイフを取り上げるより、その子の気持ちを考えてほしい。中学生がどうしてナイフを持たなければいけないのかを考えてほしい」

この優しさと物事を本質的にとらえる感性にこたえ得る教育と社会をつくるのが急がれている。せめて「競争的」に子どもを駆り立てない優しい大人でありたいと思う。

(東京・東大和第一中学校教諭)

労働総研／国際労働研究部会執筆

『世界の労働者のたたかい—1997』刊行 —世界の労働組合運動の現状調査報告・第4集—

全労連は表題の現状調査報告書を発刊した（98年3月）。この現状調査報告書の作成には、労働総研／国際労働研究部会の97年度1年間の研究活動をふまえ、構成メンバーは執筆をはじめ全面的に協力した。これは1994年版、1995年版、1996年版に次ぐ第4集である。

この1997年版には、アジア、オセアニア、中東、アフリカ、北米、南米、西欧、東欧、独立国家共同体など53ヶ国を取り上げるとともに、それぞれの地域の概観を付している。データファイル的な事例調査を基本としながら、この1997年版ではとくに、韓国、ベトナム、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスなどいくつかの国々について、それぞれのたたかひの背景や筆者の視点を含めて詳述している。B5版・127ページ。

頒 価 500円（送料240円）

申込先 全労連国際局

〒105-0004 東京都港区新橋6-19-23 平和と労働会館6F

TEL：(03) 5472-5841

FAX：(03) 5472-5845

世界の労働者のたたかい
1997

—世界の労働組合運動の現状調査報告—

第4集

1998年3月

全国労働組合総連合